始まり

二階堂雲前

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
始まり

【Ｎコード】
Ｎ７４６６Ｐ

【作者名】
二階堂雲前

【あらすじ】
主人公、佐野由太郎の恋愛苦労話の始まり。
くすっと笑っていただけると嬉しいです。

私、こういうと女性に思われがちだが私は生物学上でも自らの意識上でも立派な男である。名前も佐野由太郎（さのゆたろう）と明確な男として証明している。加えて体躯は細身ながら身長は１８０近く、顔立ちは角ばった黒縁眼鏡を掛けたお世辞にも整ったとは言えないのだから、高々一人称が私だからというだけで私を女などという輩はいないだろう。事実、私が生まれてからかれこれ１８年になるがそんな酔狂な奴には出会わなかった。そんな私だがつい最近恋に落ちた。何度もういうように私も立派な男児である。恋くらい当たり前のことなのだが、今回はなんというか相手がすこぶる悪い。その相手は学校のマドンナで手を出すと非公認のファンクラブが襲ってくるとか、異世界の王女様で告白したら連れて行かれてしまうとか、１００人斬りを達成した氷の女などというわけではない。ただ自分が正しいと思い続けていて、人の話を聞かない子ではあるが…。

では、何が悪いのかというと彼女は目が見えないのである。先ほど私がいかに男であるかを力説したが、唯一女性らしい部分が声なのだ。男にしては妙に高くハスキーの様な声。基本的に感情的になることもないので私の落ち着いた声を聞いて彼女は私を女だと勝手に思い込んでしまったのである。先述したとおり彼女は自分が正しいと信じて疑わない。故に私の本名を伝えても、私をからかっているんでしょなどと頬を膨らませて言うものだからつい、強く言いだせないのである。見せることが叶わず、説得もできない。私は一体どうしたらいいのだろうか？

私が彼女と出会ったのは怪我をした友人の見舞いとして病院に行った時である。直ぐに手を出す癖のある奴で今回の怪我の理由も喧

嘩によるものであった。とはいえ、そいつはそいつなりに自分の正義というか、なんというかそういったものがあり、それに反したような奴らに対してだけ手をあげる根はもともといいやつである。故に私も友人としてやっていてこの時もわざわざ見舞いなどということをしたのだった。彼の病室は所謂集合病棟で一部屋に数人がいるよくドラマなんかでも見る一般的な病室であった。陽気なじい様がいたり、私たちより少し年上な様子の目鼻立ちが整った兄貴的存在の人がいたりと中々に楽しめた場所であった。さて、そんな病室で友人と他愛もない話をして、ふと窓から外の景色を覗いたときである。私が彼女を見たのは。木々から木葉が舞い落ちる多少開けた場所で障害者用の棒を握りながら、腰までありそうな長い黒髪を振りかざし、私よりも幾分も小柄な体躯を忙しなく動かして目元に巻いた包帯すら気にさせぬような溌剌とした笑顔を親に向けている様。まるで私は大丈夫とでも告げるかのごとく。その様子を目にして私は一瞬で彼女の虜となった。何処に惹かれたのか、それは今でも皆目見当がつかない。もしかしたら彼女の笑顔の裏の憂いを帯びた表情を垣間見たと勝手に勘違いして、何とかしてあげたいなどとおせっかいな感情が生まれただけなのかもしれない。だが、間違いなくその一瞬で私は恋に落ちたのだ。

彼女との交流は直ぐに始まった。私は普段は受身であるが一度決めたことに対しては常時からは考えられないほどの行動力を示す。過去には夏休みを利用して自転車で北関東から北海道まで行くなどと馬鹿な計画を立てた結果、青森の八戸市まで着いて帰りの日数的に無理だという結論に達した事があるほどである。そんな私である。彼女を見かけたその日は大人しく帰ったものの、彼女と仲良くなると一度決心すると翌日にはまた友人の見舞いと称して彼女に会うために病院へと足を運んだ。友人との会話もそこそこに彼女を探し始めたはいいが、何処の病室にいるかもわからなければ、名前も知らない彼女を探すのには苦労するかに思えた。しかし、意外や意外彼

女はすぐに見つかった。最初彼女を見かけた場所は彼女のお気に入りの場所のようでそこに彼女はいたのである。偶然だが、私にはそれが天からの思し召しのように思え、彼女へと声をかけた。

「すみませんが」

「ッはい」

後ろから声をかけたからであろうか、はたまたここが人気のない場所だからであろうか、驚いた拍子に少しばかり飛び上がった彼女の姿は筆舌にしがたいほど可愛らしく、また私の胸を締め付けた。

「えーと、あの」

話しかけるまでは良かったのだが、この時の私はどういうわけか、話しかけることにばかり集中していて内容など全くといっていいほど考えてもいなかったのである。そのため、どもってしまった。今にして思えばこれが今の私の悩みの根源なのかもしれない。

「わかったぁ」

いきなり大声を挙げて両手をパチンとたたき合わせた彼女。なにが分かったのか。到底私には理解できるはずなど無く、私の反応の前に彼女は言葉を紡ぐ。

「あなた、恥ずかしがり屋さんなんだねぇ。私と友達になりたいんでしょ？」　恥ずかしがり屋さんという部分は違うが、友達になりたいという部分はあっていいた。故に首肯しようとし、彼女の眼のあたりに巻かれている包帯を目にして慌ててはい、と返事をした。

「そうでしょう。だと思った。いいよ、友達になろう」

にこやかな笑顔と共に出される手。握手なのだろうと思い、それに答えて彼女と握手を交わしたのである。一見何の問題もなく目的を果たし、万事オーケーの様であった。この後の言葉さえ続かなければ。

「友達になったはいいけど、相手の名前も知らないんじゃね、しょうがないし。私は茜屋岬（あかねやみさき）っていうんだ。君の名前は？あっ、でも君の声はすっごく綺麗だからきっと女の子らしい可愛い名前なんだろうなぁ」

この言葉に思わず固まってしまい、二の句を告げずにいると更に彼女、岬の暴走は止まらず最終的にはこんなことまで言いだす始末。
「そっか、自分の名前も言うのが恥ずかしいぐらい恥ずかしがり屋さんなのか。なるほどなるほど。じゃあさ、次会った時までにさ、何か考えといてよ。それじゃ、名無しの女の子さん」
それだけ言い残すと彼女は嵐のごとく去って行った。彼女と友達になる。第一段階は知り合いなることであったにもかかわらず、いきなり友人となったのだから目標達成はおろか、軽々と越えていったのだが、この時の私は釈然としなかった。さらに翌日、岬に本当の名前を告げたところ腹を抱えて笑われながらこう言われた。
「何か考えてきてっていったけどまさか男の名前なんて。佐野さんってユーモアあふれる人なのね」
これ以降何度も私が男だと言っても聞く耳を持たず、未だに私は女と思われたままの佐野さんなのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7466p/

始まり

2011年3月28日18時10分発行